

キュレーションのつくるまちの魅力

—北アルプス国際芸術祭 2017 を事例に—

松田 愛

AI MATSUDA

■地域活性化と芸術祭

芸術祭におけるキュレーションの可能性とは何か。2000年より3年に一度開催されている「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」をはじめ、いまや全国各地の自治体で、芸術祭やアートプロジェクトが数多く開催されている。2015年に第6回目を迎えた越後妻有アートトリエンナーレは、アートを媒介に、過疎高齢化の進む豪雪の中山間地を、人が自然と関わりながら長い時間を経てつくりあげてきた「里山」の風景として、その価値を再発見させることで、リピーターを含め国内外から多くの人々が訪れる芸術祭として評価されている(*1)。芸術祭を契機とする地域再生への期待は、瀬戸内国際芸術祭への注目や、2017年に始まった北アルプス国際芸術祭、奥能登国際芸術祭など新たな芸術祭の動きからもみてとれる。

他方で、全国各地で開催される芸術祭の内容の画一化

やマンネリ化が懸念される中、経済効果への注目のみならず、作品の維持管理の問題、事業の評価方法、芸術としての質の担保やキュレーションの重要性など、様々な観点から芸術祭と地域の関わりについて、考察が進められている(*2)。芸術祭をどのように評価できるかという難しさは、あいちトリエンナーレ2016の芸術監督を務めた港千尋の言葉からも読み取れる。「国内外でこれだけ多様な芸術祭が開かれている状況では、評価軸そのものも多様になるのではないかと思う。言い換えれば、『軸』は自明のものとして与えられているわけではなく、むしろそれぞれが軸をつくり出す必要がある」と港は語る(*3)。

また、あいちトリエンナーレ2013や札幌国際芸術祭2014などに共同キュレーションで参加した飯田志保子や、美術家・美術批評家の黒瀬陽平は、芸術祭におけるキュレーションの重要性を強調する(*4)。飯田は、

「ツリーズムの満足度を優先し作品の芸術的価値についての議論ができない芸術祭となってしまふ」ことへの危惧から、「芸術祭にキュレーションされた展示会の要素がたとえ一部であっても存在すること、地域の美術機関や国外のカウンターパートとの連携の重要性を殊更強調したい」と語る(*5)。また、黒瀬は、「現在の乱立する芸術祭ではキュレーター(キュレーション)すら不在(あるいは著しく低レベル)であることが多い」と指摘した上で、「芸術祭は展示会であり、そこにはキュレーションが不可欠である」と強調する(*6)。芸術祭やアートプロジェクトにおいて、作品の芸術的価値についての議論が抜け落ちてしまっていることへの危惧は、地域名を冠した美術のイベントを「地域アート」と名付ける芸芸批評家の藤田直哉の著書『地域アート 美学/制度/日本』に詳述されている(*7)。藤田は、地方創生の一環として、芸術の中身や「美」についてほとんど問われることのないまま、地域活性化や経済効果に寄与するものとしてアートが活用される現状に対し、次のような危惧を述べる。

質の評価が困難であるか、基準が存在しない状態で、なし崩し的に、地域アートの中に現代アートが

巻き込まれている状態がある。「芸術性」を判断するのは、誰なのだろうか。このままでは「地域を活性化するもの」こそが「現代アート」であるというふうに、定義の方が変化していくのではないだろうか(*8)。

このような危機感はおそらく藤田一人のものではないことは、上記のようなキュレーションの重要性が指摘されることからもうかがえる。上述したように、芸術祭への様々な批評的考察がなされると同時に、実際に芸術祭のあり方自体も変化を見せ始めている(*9)。それでは、このような動きの中、今なお多くの人々が訪れる、地域での芸術祭には、どのような可能性を見出すことができるのか。本稿では、昨年初めて開催され、多くの来場者を集めた北アルプス国際芸術祭を事例に、作品の芸術的価値とは何か、その価値を明らかにしつつ、地域の魅力を引き出すキュレーションとはどのようなものなのかについて、考察してみたい。そこから、地域で芸術祭が継続されることの意義を導き出したいと考える。

■北アルプス国際芸術祭2017

長野県の信濃大町では、木崎湖畔を舞台に、地元の家たちが中心となり、「原始感覚美術祭」を数年に渡って開催してきた（*10）。2014年には大町市全域で開催に、「信濃大町食とアートの廻廊」が北川フラムをディレクターに迎え、開催された。北川は、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」、「瀬戸内国際芸術祭」の総合ディレクターをはじめ、各地でアートによる地域づくりの実践に携わってきたアートディレクターである。2014年のイベントの発展型ともいえる国際展「北アルプス国際芸術祭2017」信濃大町食とアートの廻廊」は、総合ディレクターに北川を迎え、「土地固有の生活文化を表現する『食』と、地域の魅力を再発見する『アート』の力によって、大町市に内在するさまざまな価値を掘り起こし、北アルプス山麓の地域資源を世界に発信することで地域再生のきっかけとなることを目指して」開催された（*11）。人口約28,000人の大町市は、「北アルプスの山々を映す仁科三湖や、豊富な温泉など自然にも恵まれ」、「北アルプス登山の拠点として、また立山黒部アルペンルートの長野県側の玄関口として、多くの観光客で賑わって」いる。一方、「日本創



写真1：鷹狩山山頂から眺めた信濃大町の風景、東山エリア（北アルプス国際芸術祭2017）筆者撮影

成会議が発表した消滅可能性都市に上がるほど、過疎高齢化も深刻化して」いる現実が、芸術祭開催の背景にある（*12）。芸術祭のメインテーマは、「水、木、土、空。」であり、北川はテーマに込めた思いを、「そして信濃の人が一生仰ぎみる、高い、青い空。私はそれを水・木・土・空の世界と言ってみたくまりました。そこには透明さと、重さがある。これらの風土、時間の積層を見ていただきたい（*13）」と語る。

実際、本芸術祭では、水や土など大町の自然をテーマにした作品が多く見られた。また、水とも関わる地域の民話「龍の子太郎伝説」に取材した作品も複数見られた。源流エリア、仁科三湖エリア、市街地エリア、東山エリア、ダムエリアの5つの地域に36組の作家による作品が散りばめられ、それぞれの場所の特性を生かした、まさにサイト・スペシフィックな作品を見ることができた（*14）。実際、森林の中や湖の周辺、街を見下ろす鷹狩山の山頂（写真1）など自然の中や、駅前（写真2）から出発して名店街へと続く市街地の空き店舗や空き家を活用し、作品が設置されていた。市街地では、塩の道「千国街道」の宿場町として栄えた美しい街並を散策すると、街中を流れる用水など、ところどころに水の流れる気配



写真2：原倫太郎と原游《はじまりの庭（インフォメーションセンター）》2017年、市街地エリア [インフォメーションセンター]（北アルプス国際芸術祭2017）筆者撮影

を感じた。源流エリアへ向かう途上でも、川や田畑の用水路を勢よく流れる水音が常に心地よく響いていた。地域で開催される芸術祭の醍醐味は、このように、アートや文化を「ぎっかけ」として、その地域独自の魅力に触れることであるだろう。その魅力は、地域の風土をつくっている自然の豊かさや、伝統文化や地域文化とともに長年かけて培われてきた街の雰囲気、語り継がれてきた民話や伝承、そして何よりその地の住人の人柄や暖かさに触れた際に、実感として感じることでできるものである。しかし、ここでのアートは単なる「ぎっかけ」に過ぎないのだろうか。アートは、何かのぎっかけや媒介となる以前に、それ自体で固有の価値を有するものであるだろう。このことを考えるため、本芸術祭の中でも特に印象に残ったマリア・ヴィルツカラの《ACT》を取り上げたい。

■人生のメタファーとしての水

—マリア・ヴィルツカラ《ACT》
フィンランド出身の作家マリア・ヴィルツカラの《ACT》(写真3・4)は、「源流エリア」と名付けられた大町温泉郷の森林劇場の舞台そのものが作品になっている



写真3・4：マリア・ヴィルツカラ《ACT》2017年、源流エリア [大町温泉郷、森林劇場] (北アルプス国際芸術祭2017) © 2017 Japan Alps Art Festival Executive Committee, Photo by Tsuyoshi Hongo.



る。舞台の壁には水槽が埋め込まれ、舞台上にはグラウンドピアノが配置され、その上には水の入った鉢が置かれていた。壁から噴出する水、天井から滴り落ちる水などが、たらいやバケツに流れ落ち、水音を響かせていた。このように、所々にあらゆる形で水の気配が感じられる。さらに、ステージ中央に設けられた譜面台の前に立つと、霧が発生する仕掛けになっていた(写真5)。譜面台には譜面が置かれているが、音符の代わりに複数の蝶が描かれている。これら音符としての蝶は、ステージと観客席を空間的につなぐ役割を担っている(*15)。「信濃大町の鍵だと感じたのは、水の存在でした。下見で町を訪れるたびに、雪解け水が豊富に流れている様を目にし、活力にあふれていると感じたのです。その力は人々に影響し、環境を一変させもする。私にとって水は、まさにそのように絶えず変化する、人生のメタファーなのです(*16)。「今回の作品のテーマである水は、詩的で情緒的でもありますが、人類にとって脅威を与える危険な存在にもなり得るものです。今回の作品ではそうしたことを同時に感じていたのだと思います(*17)」。本作を体験した際には、実際、森林劇

場という場所につくられた詩的な作品の雰囲気的印象であった。「ステージの上から大事なものを見てほしい。魔法のような森です」と作家が語るように(*18)、舞台中央から客席を眺めると、森林の緑に包まれた劇場全体を、自身の身体的なスケールとして感じることができ。そこでは、雨音や、噴出する水の流れ、たらいを打ち付ける水音などの物理的な音に加え、ピアノや蝶が奏でる想像上の音楽、水槽を泳ぐ魚の気配、木々の呼吸など、様々なものを感じることができる。

る。舞台の壁には水槽が埋め込まれ、舞台上にはグラウンドピアノが配置され、その上には水の入った鉢が置かれていた。壁から噴出する水、天井から滴り落ちる水などが、たらいやバケツに流れ落ち、水音を響かせていた。このように、所々にあらゆる形で水の気配が感じられる。さらに、ステージ中央に設けられた譜面台の前に立つと、霧が発生する仕掛けになっていた(写真5)。譜面台には譜面が置かれているが、音符の代わりに複数の蝶が描かれている。これら音符としての蝶は、ステージと観客席を空間的につなぐ役割を担っている(*15)。「信濃大町の鍵だと感じたのは、水の存在でした。下見で町を訪れるたびに、雪解け水が豊富に流れている様を目にし、活力にあふれていると感じたのです。その力は人々に影響し、環境を一変させもする。私にとって水は、まさにそのように絶えず変化する、人生のメタファーなのです(*16)。「今回の作品のテーマである水は、詩的で情緒的でもありますが、人類にとって脅威を与える危険な存在にもなり得るものです。今回の作品ではそうしたことを同時に感じていたのだと思います(*17)」。本作を体験した際には、実際、森林劇



写真5：マリア・ヴィルツカラ《ACT》ステージ中央、筆者撮影



写真6：ニキータ・アレクセーエフ《ちかく・とおく・ちかく》2017年、市街地エリア [商店街の空き店舗と各所] (北アルプス国際芸術祭2017) 筆者撮影



写真7：平田五郎《水面の風景—水の中の光~山間のモノリス》2014—2017年、源流エリア [大出ホテルの里] (北アルプス国際芸術祭2017) 筆者撮影

水底の船のように、美しく詩的で幻想的な森の舞台に、夢と現実のあわいに漂う自身の姿を見出すこともできれば、生と死のはざまとしての、「人生の舞台」をそこに重ね合わせることもできるだろう。「しかし、あなたが本当にその場に立ったとき、どんな行動をするだろう?」(*19)との作家からの問いかけが、心に響いてくる。

■芸術祭におけるキュレーション
 本作品は、舞台に立つという鑑賞者の行為を含め、様々な要素で構成されるサイト・スペシフィックなインスタレーション作品である(*20)。大町の豊かさの象徴であり、時には脅威ともなり得る水の存在、そして大町温泉郷の美しい森林という資源の価値に気づかせてくれる作品であった。それと同時に、作品そのものが、一度きりの私たちの人生そのもののメタファーとして立ち現れるような、特異な体験を可能とするものであった。それは、森林劇場という特定の時間・場所を超えて、私たちの生と死という普遍的な時空間へと導くものであった。

■芸術祭におけるキュレーション
 ヴィルツカラの《ACT》で感じたような芸術体験の素晴らしさは、もちろん、他の多くの作品からも感じる

ことができた。信州の伝承「帚木」に着想を得た作品として、商店街の各地に自身の絵を貼り出したニキータ・アレクセーエフの《ちかく・とおく・ちかく》(写真6)。大出ホテルの里に設置された、平田五郎の《水面の風景—水の中の光~山間のモノリス》(写真7)。龍の子太郎の民話に着想を得て、市街地の蔵に鮮やかな色彩で龍や水の流れを思わせる形象を描いた、湊茉莉の《みすずかるしなの》(写真8)。空き家から収集された日用品や樹木などを集積させて構成された、カラフルなボートの木崎湖に浮かべたアルフレド&イザベル・アキリザンの《ウオーターワールド(存在と不在)》(写真9)は、ビール瓶のケースや雪かき用のシャベルなど、スキー客向けの民宿の多いこの地域の特徴を映し出していた(*21)。その木崎湖畔近の空き家を白く透き通る、やわらかい布で包んだケイトリン・RC・ブラウン&ウエイン・ギャレットの作品《ボールの向こうに》(写真10)は、人口減少という現代日本の社会課題に目を向けさせつつ、軽やかで美しい風景をつくりだしていた。紙幅の関係上、全てをここに列挙することはかなわない。しかし、地域で芸術祭を開催することの意義として忘れてはならないのは、芸術祭が、まずはアートと人々との出会いの場であるということ



写真10：ケイトリン・RC・ブラウン&ウェイン・ギャレット《ペールの向こうに》2017年、仁科三湖エリア [木崎湖畔の空き家] (北アルプス国際芸術祭2017) 筆者撮影

である。したがって、芸術祭に求められるキュレーションとは、第一に、作品と人々との出会いの機会を創出するという基本的な、しかし最も重要な仕事であるといえる。

ここで、今一度、キュレーションという言葉の意味を確認しておきたい。この言葉自体は、現在、多様な意味で使われているが、元々は博物館・美術館などの学芸員と同義で使われる「キュレーター」に由来する。国際的に活躍するキュレーターの長谷川祐子は、キュレーターの仕事を、「展覧会やプロジェクト企画の実現を通して、鑑賞者と作品を媒介する。作品と人とを出会わせ、作品についての理解をうながすことを、主たる仕事としている」と説明する^(※22)。

しかし、近年、アートとの出会いの機会が、美術館やギャラリーから、芸術祭やアートプロジェクトなど多様な場へと広がっているように、「キュレーション」の定義もまた、拡張を見させている。成相肇は、「キュレーションとは、人が作りだしたものに織り込まれた無数の情報を読み取り、その価値を分かち合おうとすること。あるいはもっと端的に、文化を介して公共性を考える術である」とする^(※23)。また、「キュレーターは社会に対



写真8：湊茉莉《みずずかるしなの》2017年、市街地エリア [商店街の蔵] (北アルプス国際芸術祭2017) © 2017 Japan Alps Art Festival Executive Committee, Photo by Tsuyoshi Hongo.



写真9：アルフレド&イザベル・アキリザン《ウォーターフィールド (存在と不在)》2017年、仁科三湖エリア [木崎湖畔] (北アルプス国際芸術祭2017) 筆者撮影

し、芸術の持つさまざまな可能性と普遍性を説明すると同時に証明していく責務を負っている」と考える窪田研二は、「社会を大胆に横断し、文化の可能性を最大限に引き出すことが重要であり、そのための実践こそが新たなキュレーター像として期待される」とし、「それは同時に大衆化された芸術という領域で消費されることなく、芸術の持つ批評性や先見性、想像力を伝えていくというキュレーターにとって不可欠な行為でも」あると述べる^{*24}。さらに、竹久侑は、「キュレーターの仕事のかなめは『考える場』を開くことであると思います。何かを主張する展覧会であれ、娯楽性の強いものであれ、キュレーションに大切なのは、複数の視点の交錯する場・ある思考を吟味できる場をつくることで、鑑賞者のひとりひとりが自らの視座や考えをいまいちど省察する機会を設けることと考えます。これこそがキュレーターが展覧会を始めとしたさまざまなメディアを通して社会に送り出す価値ではないでしょうか」と提言する^{*25}。

このように、キュレーションという試みは、作品と人々の出会いを創出することで、新たな価値を創出することを原義として内包しながら、人々にとって、開かれたい思考や対話の場をつくることへとその意味を大きく拡

張してきている。それでは、地域再生を目標とする芸術祭の中で、上記のような新たなキュレーションの試みは、いかなる可能性を持ちえるのか。

■芸術祭が地域にもたらずも

芸術祭では、友人や家族に誘われて作品を見に行っても、アートと出会う貴重な機会を提供することとなる。したがって、先程も述べたように、アートと人々の一期一会の出会いをつくるのが重要となる。その出会いを通じて、来訪者は地域の魅力を発見する。他方で住民は、外からやってくるアーティストや来訪者という、他者の視点を通じて、自分たちの街の魅力を再発見することとなる。あるいは友人や家族、同じ地域の住人など大切な人々と時間や体験を共有することになるかもしれない。住民と来訪者のさまざまな交流も生まれるだろう。そして、出会いや発見の次の段階として大切になってくるのは、「育てる」という意識である。それは、芸術や地域文化への理解を育てることから始まり、アートとの出会いを通して、創造性や想像力、そして豊かな感受性を育むとともに、他者や未知なるものへの関心、寛容性を涵養

すること、多様な価値観、多様な生き方の可能性を受け入れられる、豊かな地域社会を育てることへとつながっていく。市民や来訪者が、ある時にはサポーターとして、ある時には鑑賞者や批評家として、またある時には職員やガイドボランティアとして、さまざまな立場で芸術祭に関わることの意義も大きい^{*26}。そのような複数の視点、複数の立場から、芸術祭の意義やアートの可能性について問いかけて、自ら積極的に評価を行っていくことで、芸術祭は自主的な学びの場となりえるのではないだろうか。竹久の語るように、「複数の視点の交錯する場・ある思考を吟味できる場」として^{*27}。

芸術祭以前から、自主的な取り組みとして続けられる原始感覚美術祭や、大町エネルギー博物館、塩の道博物館など特色ある博物館の存在、また、街中のギャラリーの活動なども重要である。そのような従来からの多様な活動と芸術祭が、芸術文化への複数のチャンネルとして継続され、時に連携することによって、豊かな自然とアートのあるまちとして、地域独自の魅力を育んでいくことが可能になるだろう^{*28}。

謝辞

本研究は、平成28年19年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「キュレーションの実践による農山村の自然・文化資源享受能力の再生」(P16K14997)の助成を受けたものです。

本論文を執筆するにあたり、急な依頼にも関わらず、作品写真の提供に快く応じてくださいました大町市役所まちづくり交流課国際芸術祭推進担当の西條哲也氏、マリア・ヴィルツカラ氏の作品に関する質問に、迅速にご対応いただきました、アートフロンティアに、厚くお礼を申し上げます。

また、北アルプス国際芸術祭2017に関する新聞記事及び雑誌記事等貴重な資料の収集に協力してくれた学生に、心から感謝の意を表します。

【註釈】

*1 『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』によれば、「大地の芸術祭」がそれ以前のアートプロジェクトと大きく異なる点として、「地方自治体が主催していること」があげられる。同書によれば、本芸術祭は、「作品を2000の集落に点在させることで、鑑賞者の回遊性を高めると同時に、越後妻有地域の価値を『日本の原風景』として再発見させることで注目を集めた。また、都会の若者や地域住民が『こへび隊』と称するボランティアとして、作品の制作補佐や監視などを行ったことも特徴である。アートだけでなく、古民家をリフォームし、地元の女性たちの農家レストランとして活用し、コミュニティビジネスが立ち上がったことなどからも、新しい地域づくりのあり方としての評価を確立した」とされる。「Oアートプロジェクト概説 Lecture 1 歴史的位置付けとその変遷」空間から場、

- *1 「北アルプス国際芸術祭2017」公式HP「概要」より、<http://shirano-omachi.jp/about-jp/> (2017年12月29日閲覧)。
- *2 「アートフェスティバル、どう評価する？ー日本の芸術祭の課題と未来」『美術手帖』2017年7月号 (vol.69 NO.105) 74ー89頁。
- *3 港千尋「芸術祭の批評軸とは何か」前掲書、84頁。
- *4 飯田志保子「芸術祭に求めるキュレーション」前掲書、85頁／黒瀬陽平「芸術祭の時代」を終わらせるために」前掲書、89頁。
- *5 飯田、前掲書、85頁。
- *6 黒瀬、前掲書、89頁。
- *7 藤田直哉「前衛のソングたちー地域アートの諸問題」藤田直哉編『地域アート 美学／制度／日本』堀之内出版、2016年、11ー43頁。
- *8 前掲書、23頁。
- *9 新たな動きとして、大分県別府市の「BEPPI」があげられる。本プロジェクトは、2009年から2015年まで行われた別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」の後継企画として、2016年より開始した。「別府市を舞台に開催する個展形式の芸術祭」であり、「国際的に活躍する1組のアーティストによる、地域性を活かしたアートプロジェクトを毎年秋に実現」している。BEPPI PROJECT公式HPより、<http://www.beppproject.com/work/1738> (2017年12月29日閲覧)。
- *10 「信濃の国 原始感覚美術祭2017」は、2010年に「原始感覚美術展」として始まり、2017年で8回目を迎えた。

- *11 「北アルプス国際芸術祭2017」公式HP「概要」より、<http://shirano-omachi.jp/about-jp/> (2017年12月29日閲覧)。
- *12 前掲書。
- *13 北川フラム「水・木・土・空の大地」『北アルプス国際芸術祭2017』公式ガイドブック、現代企画室、2017年、10ー11頁。
- *14 特定の「場所に所属する作品や置かれる場所の特性を活かした作品、あるいはその性質や方法を指す」。そのような「場所の特性」にはその土地の環境や生活空間、歴史的、政治的、文化的な場の成り立ちまで含まれ、作家はそれらの諸条件に注目し、作品に組み込む」。中山亜美「サイト・スペシフィック」『現代美術用語辞典 ver.2.0 - Artscape』<http://artscape.jp/artword/index.php/> サイト・スペシフィック (2017年1月8日閲覧)。
- *15 本作品に託された蝶のモチーフの意味については、アートフロントギャラリーよりご教示いただいた。蝶は彼女の作品に度々登場する重要なモチーフであるとのこと。(2018年1月5日、筆者によるメールでのインタビュー)。
- *16 「作家インタビュー マーリア・ヴィルッカ」前掲公式ガイドブック (*13)、27頁。
- *17 前掲書、28頁。
- *18 「水のアートが気持ちいい！ 『北アルプス国際芸術祭』スタートだよ。」(June 20, 2017 | Art | casabrutus.com | text_Naoko Aono, editor_Keiko Kusano) <https://casabrutus.com/ar/48997/3> (2017年12月29日閲覧)。
- *19 マーリア・ヴィルッカの作品紹介に掲載された、作家のコンセ

プト文からの引用。前掲公式ガイドブック (*13)、76頁。

- *20 「ステージと観客の間の見えない境界を扱っている」インスタレーションとされる本作品は、「ピアノ、6つの水槽、55ℓの水の入ったガラスボウル、蝶の本、霧と雨、古い木のベンチ(うち7つは金色に塗装されたもの)、壁や天井からたらいやバケツに飛び散る、あるいは滴り落ちる水と、ピアノから奏でられる音楽が作り出す音」といった様々な素材から構成されている。「MARIA WIRKALA」公式HPより、<http://www.maarawirkala.com/works/act/> (2017年12月29日閲覧)。
- *21 この貴重な指摘については、地元で民俗を営む方からご教示いただいた。
- *22 長谷川祐子「キュレーション 知と感性を揺さぶる力」集英社、2013年、12頁。
- *23 成相肇「キュレーションが拡散している」(Basic Work1 変わる言葉、変わる時代)フィルムアート社編「キュレーションの現在」アトが「世界」を問い直す」フィルムアート社、2015年、49頁。
- *24 窪田研二「キュレーションの定義を拡張する」(Basic Work1 変わる言葉、変わる時代) 前掲書、66ー67頁。
- *25 竹久佑「主張・コンセプトを訴える」(Basic Work2 どんな価値を生み出すのか) 前掲書、77頁。
- *26 芸術祭の評価について、藤田直哉は、芸術祭がはらむプロジェクト(投企)の側面に着目し、『投企』とは、新しい自己の在り方を生み出すために未知なる領域に踏み出してしまうことである」とし、その評価の難しさを指摘した上で、「鑑賞者や運営者や住人、

作家などが、この行為にコミットし、意見を発信することが、必要かつ有効な評価の方法ではないか? 芸術祭が特権的な「作家」ではなく集合的な創造性に力点をシフトしていることに対応し、批評も集団的な方法論を用いるという意味でも」と提案する。藤田直哉「芸術祭を、意義のあるものにするか、しないか」前掲書 (*2)、88頁。このことは、芸術祭のキュレーションを、個人のディレクションやキュレーションを超えた「集合的な創造性」の場として読み解く上でも、興味深い指摘である。

- *27 竹久、前掲書 (*25)、77頁。
- *28 芸術祭と地域の関わりを考える上で、名古屋の港町を拠点に活動する「Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]」の活動は興味深い。アートイベントや展覧会などを企画する他に、地域とアートの関わりを考えるトークイベントやワークショップなどを開催している。あいちトリエンナーレ2016やアッセンブリッジ・ナゴヤ2016、2017の共同キュレーターを務めるインディペンデント・キュレーターの服部浩之は、MAT, Nagoya について、「あいちトリエンナーレにスタッフやボランティア、アーティストとして関わった人が、その経験を活かし芸術祭とは異なる現場を立ち上げて活動を展開し、その成果は着実に実を結び始めている。一過性と思われがちな芸術祭だが、じつは人材育成や文化の醸成の場となりつつあり、次の祭までのあいだの時間の設計が、足元を固めるためにはとても重要なのだ」と指摘する。服部浩之「一過性を越え、拠点となりうるか」前掲書 (*2)、86ー87頁。